三重大学教育学部研究紀要　第71巻　教育科学（2020）255－267頁

「作業場における活動」と「社会への開かれ」のインターフェイス
－ドイツ田園教育舎における作業場活動の位置づけ－

伊藤敏子*

Intersection between “Activities at Workshops” and “Openness toward Society”
－A Legacy of the German *Landerziehungsheim*－

Toshiko Ito *

Abstract

According to the new *Japanese Curriculum Guidelines*, which take effect in 2020, education will need to instill greater adaptability towards the changing demands of the workplace, a concept which is touted under the slogan “openness toward society”. This paper examines the historical lineage of workplace flexibility in vocational training, foregrounding its prefiguration in the use of workshop training at the German *Landerziehungsheim*, a type of reformist boarding school located in a rural setting. From their founding days in the early twentieth century up to the present time, numerous such schools have offered curricula combining academic learning with vocational training. Thus, both Schule Schloss Salem (founded in 1920) and Urspringschule (founded in 1930) have consistently required students to be trained in the workshops, although the purposes attributed to such training have changed considerably over the decades. The former school, which once provided the option of earning certain vocational certificates, now limits the purpose of workshop training to the attainment of a well-rounded education, in accordance with the purpose of workshop training as specified a century ago. The latter school evolved the purpose of workshop training, strengthening the option of earning various vocational certificates. Irrespective of the kind of changes undertaken, the changes at either school show a tendency to strengthen workplace flexibility as an attitude of social responsibility.

キーワード：新教育・作業場・職業教育・社会への開かれ
Keywords: New Education, Workshop, Vocational Education, Openness toward Society

１．ドイツ田園教育舎「作業場における活動」の変容　―「社会への開かれ」の観点から―

2020年4月の小学校における実施を嚆矢とし、その後中学校そして高等学校と順次実施されることになる新たな学習指導要領は、「多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする」ことを重視する立場を明記し、「社会に開かれた教育課程」と称される。児童生徒が学校を卒業した後に身を置くことになる社会を見通すことが困難な時代にあって、児童生徒が「社会の創り手」として生きることを想定した学校教育の役割について、本稿では「社会の創り手」の一側面をなす活動である職業に向けられた教育に焦点を当てて考察する。学校教育における職業に向けられた教育の実践については様々な手法がとられるが、ここでは「作業場の併設」を前提とする教育実践の展開で知られるドイツ田園教育舎の系譜に位置づけられる教育施設に注目することとし、20世紀初頭の設立時における「作業場における活動」の活用から近年における

＊三重大学教育学部

「作業場における活動」の活用にみられる変容を手がかりとして、「作業場における活動」と「社会への開かれ」の連関を歴史的文脈のなかで明らかにしたい。

20 世紀へと向かう世紀転換期、リーツ（Hermann Lietz, 1868-1919）は母国ドイツにイギリスのレディ（Cecil Reddie, 1858-1932）のアボツホルム校（Abbotsholme）を範とする教育施設の設立を目指すドイツ田園教育舎運動（Deutsche Landerziehungsheim-Bewegung）を興す。自然豊かな環境のなかで人間諸力の調和的発達を目指すという教育理念のもと、リーツは授業の場である学校としてではなく生活の場である教育舎として機能する教育の形態を追求し、併設された寄宿舎で教師と生徒が疑似家族として生活する教育施設を構想する。ドイツ田園教育舎の日課は、一般に学校教育の核をなすとみなされる学課にとどまらず、劇活動・スポーツ活動・作業場および屋外における労作活動といった課外活動によって構成されている。この教育構想を実現する場として、1898 年には初等教育施設イルゼンブルク校（Ilsenburg）、1901 年には前期中等教育施設ハウビンダ校（Haubinda）、さらに 1904 年には後期中等教育施設ビーバーシュタイン校（Bieberstein）がいずれもリーツの手により設立される。ドイツ田園教育舎運動の精神に共鳴し設立間もないリーツの諸教育施設で教鞭をとった教師の多くは、その後リーツのもとを去りそれぞれに独自の教育施設を設立して教育実践に携わることになる。ここにドイツ田園教育舎という同一の系譜に位置づけられながらもきわめて多様な教育実践が展開されることになる。

1920 年代にその全盛期を迎えたドイツ田園教育舎運動は、同じ理念をかかげるドイツの教育施設を相互に結ぶ組織を立ち上げるにいたる。「ドイツ田園教育舎および自由学校共同体連盟（Vereinigung der deutschen Landerziehungsheime und freien Schulgemeinden）」という名を冠するこの組織は、運動の中心的役割を担った教育施設の代表者が 1924 年に一堂にオーデンヴァルト学校に会した場でその創設が宣言される。連盟創設時の加盟教育施設は、リーツの教育舎（Lietz-Heime: 代表は Alfred Andreesen）・ヴィッカースドルフ自由学校共同体（Freie Schulgemeinde Wickersdorf: 代表は校医 Otto Garthe / Rudolf Aeschlimann）・ショーンドルフ南ドイツ田園教育舎（süddeutsche Landerziehungsheim Schondorf: 代表は Ernst Reisinger / Julie Reisinger）・オーデンヴァルト学校（Odenwaldschule: 代表は Paul Geheeb / Edith Geheeb）・ゾリング田園学舎（Landschulheim am Solling: 代表は Theophil Lehmann / Hans-Wildekinde Jannasch）・レッツリンゲン自由学校作業共同体（Freie Werk- und Schulgemeinde Letzlingen: 代表は Ludwig Rudolf Bernhard Uffrecht / Ini alias Hermine Uffrecht）・ホーホヴァルトハウゼン山間学校（Bergschule Hochwaldhausen: 代表は Otto Hermann Steche / Caroline Steche）という 7 つの教育施設である。[1]自然豊かな環境のなかで人間諸力の調和的発達を目指すという教育理念のもと、ドイツ田園教育舎の系譜に連なる教育施設は、いずれも作業場を併設している。しかし、戦前・戦後における「作業場における活動」の位置づけに注目すると、諸教育施設における発展の方向性は大きく二つに類型化して把握することができる。ひとつは「作業場における活動」を職業に関わる資格の取得と結びつけて展開する教育施設であり、いまひとつは「作業場における活動」を 20 世紀初頭の設立時の目的である人間諸力の調和的発達への手段に限定する方向へと回帰させる教育施設である。本稿では前者を代表するウアシュプリング学校（Urspringschule）と後者を代表するザーレム城校（Schule Schloss Salem）を比較することで、両者の「作業場における活動」の活用を「社会への開かれ」という観点から考察したい。

２．職業資格取得を再評価する動き　―ウアシュプリング学校の場合―

２．１．ヘルの教育構想

ウアシュプリング学校はヘル（Bernhard Hell, 1877-1955）が 1930 年に創設したドイツ田園教育舎の系

[1] Vgl. Näf 2006, S. 290.

譜に連なる教育施設である。国家社会主義の台頭がドイツ田園教育舎運動に影を落とす 1930 年代に入ってからの設立という点で、ウアシュプリング学校は数あるドイツ田園教育舎においてきわめて異色の存在といえる。創設者であるヘルは、1901 年にシュトゥットガルト工科大学で数学と化学を修め、さらにフライブルク大学で哲学と心理学を修めた後、「ドイツ田園教育舎および自由学校共同体連盟」にその立ち上げ時から加盟する２つの代表的なドイツ田園教育舎――ヴィッカースドルフ自由学校共同体とゾリング田園学舎――でそれぞれ 10 年以上教鞭をとっている。ヘルはまずゲヘープ（Paul Geheeb, 1870-1961）とヴィネケン（Gustav Wyneken, 1875-1964）が設立したヴィッカースドルフ自由学校共同体において 1907 年から――ヴィッカースドルフ自由学校共同体に復帰したヴィネケンとの不和を理由として辞する[2]――1919 年までドイツ田園教育舎の理念に没入しながら教職体験を積み、続いてゾリング田園学舎において 1919 年から 1929 年まで教職体験を重ねることでドイツ田園教育舎に関わるみずからの信念を確たるものとする。四半世紀にわたるドイツ田園教育舎における教職体験で獲得した知見を携え満を持してみずからの教育施設であるウアシュプリング学校を設立時、ヘルはすでに――ドイツ田園教育舎設立時の創立者の年齢としては異例の高齢である――52 歳を迎えている。ドイツ田園教育者に連なるみずからの教育施設をこの年齢をもって設立することの意図について、ヘルは福音主義の理想に貫かれた教育施設を誕生させるというみずからの夢について熱く語るが、その一方で、その教育方針に心の底から共感を覚えているゾリング田園学舎を去ることについての寂しさも吐露している。したがって、ヘルの理想とする教育実践は、福音主義の理想を前景化することを除けば、すでにゾリング田園学舎に実現されていたと解釈することができる。ヘルの思い描く教育実践がきわめて高い完成度で実現されていたとされるゾリング田園学舎の教育実践がどのようなものであるかをまず概観しておきたい。

２．２．ゾリング田園学舎の「作業場における活動」

ニーダーザクセン州南部の丘陵ホルツミンデン（Holzminden）にあるゾリング田園学舎は、リーツのイルゼンブルク校で教鞭をとったクラーマー（Alfred Kramer, 1868-1918）[3]、レーマン（Theophil Lehmann, 1918-1943）[4]、フィーブロック（Gerhard Viebrock）、ツィンマーマン（Gerhard Zimmermann）という 4 人の教師がヘルンフート同胞教会というみずからの共通の帰属性を軸とする教育施設として 1909 年に共同で設立したドイツ田園教育舎である。[5]

ゾリング田園学舎はドイツ田園教育舎に不可欠とされる農場と作業場を併設し、設立当初から労作を重視したカリキュラムを実施している。[6]ゾリング田園学舎では、リーツのイルゼンブルク校で 1906 年以降庭師職にあったツィンマー（Papa Zimmer）の主導により 1922 年には園芸活動、さらには農業活動が始動する。この活動はツィンマーの甥であるブリューニング（Erich Brüning）によって 1932 年から 1935 年のあいだ引き継がれるが、そこで生み出された農作物（ジャガイモ・トマト・インゲンマメ・玉葱・

---

[2] ヘルは第一次世界大戦に出征したルゼルケ（Martin Luserke, 1880-1968）からヴィッカースドルフ自由学校共同体の校長職を引き継ぎ、1916 年にはこれをウフレヒト（Ludwig Rudolf Bernhard Uffrecht, 1885-1964）に引き継いでいる（vgl. Günther 1980, S. 478）。しかし、ヴィネケンがヴィッカースドルフ自由学校に復帰した 1919 年、ヘルとウフレヒトはともにヴィッカースドルフ自由学校共同体を辞することになる（vgl. ebenda, S. 479）。

[3] クラーマーは 1908 年から 1918 年までゾリング田園学舎の初代校長を務める。

[4] レーマンは 1918 年から 1943 年までゾリング田園学舎の第 2 代校長を務める。この時期にゾリング田園学舎は共学制へと変更されている。

[5] Vgl. Herrenbrück 2009, S. 24; Ebenda, S. 27. ゾリング田園学舎は、その運営形態においてドイツ田園教育舎の系譜に連なる――ゾリング田園学舎同様リーツの教育施設の元教師が設立した――ヴィッカースドルフ自由学校共同体から多岐にわたる示唆を得ている。たとえば、リーツの教育施設で「家族（Familie）」とみなされた寄宿舎における教師と生徒の共同生活は、青年運動と共振するヴィネケンによってヴィッカースドルフ自由学校共同体における寄宿舎では「同僚（Kameradschaft）」として再編されるが、ゾリング田園学舎では後者の枠組を継承している。

[6] Vgl. Günther 1980, S. 480.

大黄・スグリ）、畜産物（牛および牛乳・豚・鶏および卵）、さらにその加工品（バター・パン）は、教育施設の自給システムの重要な一端を担っていく。[7]ゾリング田園学舎では 1920 年代から製陶業（Töpferei）の作業場が存在したが、同様に早くから作業場を備えていた指物業（Tischlerei）と金属細工（Schmieden）については戦後――手工業が衰退する時流に逆らって――再度活性化されることになる。1980 年代までこの作業場における活動を牽引した指物職人ノイベルト（Erich Neubert）と金属細工職人エクスナー（Walter Exner）が、戦後ゾリング田園学舎の「作業場における活動」に黄金期をもたらしたのである。[8]金属細工の作業場はその後、新たな職人を獲得し、かつての活気を取り戻している。[9]現在、主要科目に押されて周辺科目（たとえば芸術系科目）に割く授業時間数が減少する流れに呼応するかたちで、当初は正課教育として実施されていた「作業場における活動」は[10]、正課外教育への組み替えが進行している。[11]正課外教育への移行という枠組みの変容を進めながらも、高度技術社会が現出したこの時代にあえて「作業場における活動」を継承する意義として、ゾリング田園学舎は、「自分の手で生み出すこと」、「自分にあわせて生み出すこと」、「自分の腕を磨くこと」という 3 点を挙げ、これに加えて倫理観の発達をもこの活動の成果として期待している。したがって、21 世紀にあっても「作業場はゾリング田園学舎において欠かすことのできないコア活動として維持され続ける」のであり、ゾリング田園学舎の教育活動全体のなかで「作業場における活動」は「プロジェクト活動として、さらには職業的進路にも関わる活動として」――生徒たちに人気の高い――定位置を獲得している。[12]なお、ゾリング田園学舎のカリキュラムでは、進路指導の一環として第 11 学年で 4 週間の職業実習を実施することになっている。

ゾリング田園学舎は 2013 年にゾリング寄宿舎（Internat Solling）と改称され今日にいたっている。200 名ほどの寄宿生と 50 名ほどの通学生を擁する現在も、「作業場における活動」を重視する学校として設立時の趣旨を堅持し、[13]その教育活動は国際機関からも高く評価され、2009 年にはユネスコからプロジェクト学校（UNESCO-Projektschule）の認定を受けている。学課活動についてもその成果を高く評価され、2015 年には全国理数系優秀学校ネットワーク（Nationales Excellence Schulnetzwerk MINT-EC）への登録を認められている。

２．３．ウアシュプリング学校の「作業場における活動」

続いて、ゾリング田園学舎の教育実践に福音主義の要素を付加して 1930 年に設立されたドイツ田園教育舎ウアシュプリング学校について概観したい。ゾリング田園学舎における教育活動のかたわら、父の遺産を元手に 1926 年にみずからの学校を設立する候補地探しに着手したヘルは、1929 年にシェルクリンゲン（Schelklingen）に理想の教育の拠点を見出す。ヘルが目を留めたのは、12 世紀にベネディクト派修道院として建設され、19 世紀に修道院が転出した後には綿糸紡績工場として使用され、工場が転出した後には荒廃が進んでいた不動産である。ヘルは 1930 年に妻エルゼ（Else Hell）[14]とともにこの地に

---

[7] Vgl. Ehlert 2009, S. 226.
[8] Vgl. Berthoud 2009, S. 141.
[9] Vgl. Ebenda, S. 144.
[10] Vgl. Herrenbrück 2009, S. 33; Rüger 2009, S. 96.
[11] ボッセ＝クラーン（Barbara Bosse-Klahn）とクラーン（Erich Klahn）が 1950 年代および 1960 年代に担った繊維作業場（textiler Bereich）は学舎に今日まで継承されている「天使のフリース」の制作にも携わっている。ただし、作業場そのものは 2009 年時点で閉鎖されている（vgl. Bernhoud 2009, S. 141）。
[12] Vgl. Bernhoud 2009, S. 144.
[13] Vgl. Herrenbrück 2009, S. 32.
[14] エルゼは第一次世界大戦で夫ベーム（Wenzel Böhm）を失っており、1923 年のヘルとの結婚はベームとのあいだに 1914 年に生まれた息子ヘルムート（Hellmut）を連れての再婚となる。

福音学校共同体（Evangelische Schulgemeinde）ウアシュプリング学校を設立する。[15]ウアシュプリング学校では、音楽・芸術・スポーツのための設備とならんで農場・作業場（錠前と建具）が整備され、[16]「作業場における活動」は学校近郊の住人との交流を活性化するかたちで進められる。[17]1937 年にはウアシュプリング学校における高校卒業（大学入学）資格試験の実施も認可され、ここに一般教育と職業教育を有機的に結合させたカリキュラムの土台が整うことになる。

ウアシュプリング学校は第二次世界大戦後、ヘルの委託を受けた次世代の教員によってモンテッソーリ教育にもとづく小学校（第 3 学年以降の初等教育機関）[18]・自然科学を重視するギムナジウム（8 年制中等教育機関）[19]・実科学校（Realschule）ないし共同体学校（Gemeinschaftsschule）の卒業生を対象とする 3 年制短期ギムナジウム（9 年制中等教育機関相当）と段階的に整備・拡充され今日に至っている。[20]

ウアシュプリング学校は「生徒たちが作業場の手工業活動――仕立・建具・金属加工・製陶――を直に体験し、生活と学習を総合的に結びつける糸口を提供」[21]することを謳っており、ここからは設立当初の教育方針の継承が確認できる。ウアシュプリング学校が近年とりわけ力を注いでいるのは、学校での授業と並行して建具師・仕立師・精密機械工という 3 つの職種において資格取得へと連結する手工業実習を提供することである。

「高校卒業（大学入学）資格試験プラス職業教育（Abitur plus Berufsausbildung）」というモットーを掲げたウアシュプリング学校では、高校卒業（大学入学）資格（Abitur）と職人検定審査合格証（Gesellenbrief）の同時取得を実現するカリキュラムが用意されており、仕立職・精密機械職・建具職という 3 つの職種のうちいずれかを選択した生徒たちについては、それぞれの職人検定審査に向けて体系的に組み立てられたカリキュラムを履修することにより、高校卒業（大学入学）資格取得のほぼ半年後には職人検定審査合格証を手にすることができるシステムとなっている。[22]過去 30 年の実績としては、およそ 100 名の

---

[15] 学校設立にあたってヘルは多くの大学関係者から支援を受けている。代表的な人物としては、ノール（Herman Nohl, 1879-1960）やシュプランガー（Eduard Spranger, 1887-1963）やクロー（Oswald Kroh, 1887-1955）といった教育学者とシュテーリン（Wilhelm Stählin, 1883-1975）やケーバレ（Adolf Köberle, 1898-1990）といった神学者が挙げられる（vgl. Günther 1980, S. 489）。

[16] Vgl. Günther 1980, S. 495.

[17] Vgl. Ebenda, S. 486.

[18] 小学校では第 3 学年児童と第 4 学年児童という異年齢児童によって構成される学級であり、ここにはイエナプラン教育の影響がみられる。

[19] ギムナジウムでは実験と実践を軸とする合科的なカリキュラムが提供され、第 8 学年以降については「自然科学と技術」が必修科目として加わる（vgl. Urspringschule 2018b）。

[20] ウアシュプリング学校は現在およそ 200 名の児童生徒を擁し、その半数以上は寮生であり、残りの児童生徒は学校近隣からの通学生である。ウアシュプリング学校では、保護少年や発達障害をもつ児童生徒も受け入れ療育を提供している。

[21] Urspringschule 2018a.

[22] 仕立職を選択した生徒たちの場合、第 8 学年ないし第 9 学年から第 12 学年（5 年半ないし 6 年の期間）において追加で学内の作業場で準備を含む 3840 時間の授業と高校卒業（大学入学）資格試験後に数か月間の学外における実習を履修することで、ウルム手工業会議所およびウルム・ボーデンゼー・オーバーシュヴァーベン仕立職が主催する職人検定審査（Gesellenprüfung）を受けることができる。ウアシュプリング学校ではこの職業教育を提供することで生徒たちに資格取得への道を開くとともに、仕立業界の全体像を把握できるプログラムとして活用できるようにしている。
ウアシュプリング学校では今世紀に入って間もなく――ギムナジウムが手工業企業と連携して資格取得のための職業教育を実施することはきわめて稀なことであるが――新たな職業教育として精密機械職を導入した。精密機械職を選択した生徒たちの場合、第 8 学年から第 12 学年（5 年半の期間）において 4500 時間の授業と 240 時間の企業実習、さらに高校卒業（大学入学）資格試験後に数か月間の学外における実習を経て、職人検定審査を受けることができる。ウアシュプリング学校では、このカリキュラムを提供することで生徒たちに自立した生活への道を開くとともに、企業による資格認定を取得するための支援を行っている。
建具職を選択した場合、生徒たちは、第 8 学年から第 12 学年（5 年半ないし 6 年の期間）において 2 回のプロジェクト週と 6 回の週末に開講される授業を受け、さらに建具師養成の認定をうけた企業で長期休暇中に実習を行

生徒が高校卒業（大学入学）資格試験と職人検定資格合格証を併せて取得しウアシュプリング学校を巣立っている。

3. 職業資格取得を相対化する動き　―ザーレム城校の場合―

3. 1. ハーンの教育構想

ザーレム城校はクルト・ハーン（Kurt Matthias Robert Martin Hahn, 1886-1974）が 1920 年に創設したドイツ田園教育舎の系譜に連なる教育施設である。ハーン自身がみずからの教育構想を「既存の教育構想の折衷」と特徴づけていることは広く知られているが、その構成要素としては「フランスのシトー会の伝統、ドイツの田園教育舎運動の構想、古代ギリシアのプラトン『国家』の理念、さらにイギリスのパブリック・スクールの伝統」[23]が挙げられており、ハーンはこれらを有機的に組み合わせることで独自の教育構想を確立することになる。

ハーンはドイツ系ユダヤ人としてベルリンに生を受け、1904 年から 1914 年までオックスフォード大学・ベルリン大学・ハイデルベルク大学・フライブルク大学・ゲッティンゲン大学で哲学・古典文献学・教育学を学ぶ。[24]とりわけゲッティンゲン大学で哲学史および倫理学を担当していたネルソン（Leonard Nelson, 1882-1927）は、卒業論文指導教員という立場にとどまらず、哲学政治アカデミー（Philosophisch-Politische Akademie）およびヴァルケミューレ田園教育舎（Landerziehungsheim Walkenmühle）の設立者としても、ハーンの教育思想の形成に大きな影響を与えている。[25]ハーンと田園教育舎との関わりについては、ネルソンとの出会いに先立つ少年期にまで遡る。マルカン（Alec Marcan）に引率されてアボツホルム校を訪問するとともにリーツの著作『エムローシュトッバ（Emlohstobba）』に触れた 16 歳のハーンはアボツホルム校に心酔する。後にハーンはアボツホルム校との出会いを「運命の呼びかけ」として振り返っている。[26]

その一方で、ハーンは田園教育舎運動が理想の立地条件とみなす「孤島のように隔離された空間」については相対化する立場をとる。ハーンはむしろ、学校の内と外を隔てる壁を崩すことに情熱を傾けており、1924 年には「現実を呼び込むため学校の壁に窓を開けよう」[27]と提言している。ハーンが崩すことを試みた壁は、学校の内と外を隔てる壁にとどまらない。ハーンは階層と階層のあいだに横たわる壁を崩すことにも精力的に取り組む。階層を超えた交流[28]を活性化する活動の一環として、ハーンは教育の観点から体験療法を取り入れ、人命救助の訓練・赤十字での救命教育・DIRG 水難救助・消防団・技術サポート（THW）に代表される奉仕活動のプログラムを提供するが、これらの活動はいずれも公式認定を受けており、したがって、これらの活動はそのままあらゆる階層に属する人々を包摂する「社会への開かれ」を実感しうるものとなっている。[29]

うことで、建具師に必要とされる知識と技能を習得することができる。ウアシュプリングあるいは提携先のウルム手工業会議所とエーインゲン商工業学校で講習を受け、高校卒業（大学入学）資格試験後に最低 3 ケ月間の学外における実習を履修することで、ウルム手工業会議所および建具師同業組合が主催する予備審査を受けることができ、予備審査受験証明書と養成期間終了証明書をもって職人検定審査を受けることができる。ウアシュプリング学校では建具業界の全体像を理解するための研修旅行を毎年実施している。

[23] Dergel/Niederhofer/Feucht 2010, S. 8; Ebenda, S. 40. なお、レールスは（Hermann Röhrs）さらにジェームズ（William James, 1842-1910）等のアメリカ・プラグマティズムからの影響についても言及している（vgl. Röhrs 1970, S. 130）。

[24] Vgl. Knoll 1986, S. 7.

[25] Vgl. Ebenda, S. 15.

[26] Vgl. Ebenda.

[27] Köppen 1967, S. 73.

[28] Vgl. Pielorz 1995, S. 205.

[29] Vgl. Köppen 1967, S. 72.

「社会への開かれ」の足掛かりとなる国際的な教育ネットワークの構築もまたハーンの功績として特記されなければならない。教育理念を共有する伝統校の国際ネットワークであるラウンド・スクエア・スクール（Round Square Conference Schools; RSCS）[30]、異文化理解を目的とする国際教育組織であるユナイテッド・ワールド・カレッジ（United World Colleges; UWC）[31]、野外体験活動のための短期学校であるアウトワード・バウンド・スクール（Outward Bound Schools; OBS）[32]はいずれもハーンの提唱によって設立された組織であり、国境を越えた規模での「社会への開かれ」の礎石をきずいたという意味において、ハーンは「社会への開かれ」志向の教育を象徴する存在とみなすことができるであろう。

3. 2. ザーレム城校の教育方針

今日まで存続するドイツ田園教育舎のなかで、ザーレム城校は生徒数の多さと階層文化の高さにおいて絶対的な存在感を示している。[33]ザーレム城校は、ハーンがバーデン公（Max von Baden, 1867-1929）からの委託を受けてボーデン湖畔ザーレム城内のシトー会修道院に 1920 年に創設した田園教育舎である。ボーデン湖に程近い谷間に位置するザーレムは、1134 年にシトー会が修道院を設けたことで歴史の舞台に登場し、その後、1802 年には豊かな自然景観と文化遺産がそのままバーデン辺境伯の居城として引き継がれる。ドイツ帝国最後の宰相として第一次世界大戦の休戦交渉をまとめた後に政界を引退したバーデン公は、「ドイツの良風美俗の回復」[34]を期し、そして何よりも第一次世界大戦後の時代を牽引する人材を育成することを願って、この地に新たな田園教育舎を興すことを決意したのである。[35]ザーレム城校開校の辞のなかでバーデン公は「辺境伯家の子どもたちと地元の才能ある生徒たちが遠いユーバーリンゲンとの往復に煩わされることなく高等学校に通えるようにする」こと、「重苦しい第一次世界大戦の経験を踏まえ、責任感と気骨と勇気を備えた新世代を育成する」ことという 2 点がザーレム城校の設立の動機であったと述懐している。[36]

---

[30] ラウンドスクエアースクールは、国際理解（International Understanding）・民主主義（Democracy）・環境管理（Environmental Stewardship）・野外体験活動（Adventure）・指導力（Leadership）・奉仕活動（Service）という 6 つの理念（IDEALS）を共有する諸学校により構成された国際ネットワークである。ハーンの唱道に賛同する――ハーン自身が設立したドイツのザーレム城校およびスコットランドのゴードンストウン校を含む――伝統ある私立学校が 1966 年に設立した組織であり、現在世界 50 ヵ国 180 校が加盟している。

[31] ユナイテッド・ワールド・カレッジは、国際教育・社会的寛容への参画・社会的責任を志向する教育の力で冷戦による分断を乗り越えることを唱えるハーンの教育理念に基づき 1962 年にイギリスに設立されたアトランティック・カレッジ（Atlantic College）をその嚆矢とし、現在は 18 の国際学校が加盟し、120 ヵ国からの生徒が学んでいる。ユナイテッド・ワールド・カレッジでは国際バカロレア資格の教育課程が採用されているが、1971 年に国際バカロレア資格の教育課程を単独校として認定された初めての学校もまた、ユナイテッド・ワールド・カレッジの最古参であるアトランティック・カレッジである。

[32] アウトワード・バウンド・スクールは、ハーンがホルト（Lawrence Durning Holt, 1882-1961）の援助を受けて 1941 年にイギリスに設立した野外体験活動のための短期学校である。自然のなかでの体験活動を通じて青少年に教育を行う非営利の冒険教育機関として定着し、現在世界 33 ヵ国に 220 ヵ所以上の拠点を持つにいたっている。

[33] 現在のザーレム城校は生徒の 95%が寄宿生であり、660 名の寄宿生を擁するザーレム城校はドイツ最大規模の寄宿学校である。三分の一の生徒はドイツ国外出身で、その出身国は 30 ヵ国にのぼる。学費は 33000 ユーロと高額であるが、四分の一の生徒は奨学金を得ている（vgl. Westermeyer 2015, S. 449f.）。設立当初からエリート学校と目されたザーレム城校は、卒業生の職業的成功や社会階層上昇と結びつき、ますますエリート学校のイメージを強化している。1990 年代以降、社会におけるエリート育成の要請の高まりを受けて、ザーレム城校の人気も高まりを見せている（vgl. Wilhelmi 1998, S. 51f.）。

[34] Degel/Niederhofer/Feucht 2010, S. 12.

[35] ザーレム城校で現在校長職にあるヴェスターマイアー（Bernd Westermeyer）によると、ザーレム城校は第一次世界大戦後の敗戦国ドイツにおいて次世代の指導者育成を目指して設立されたという経緯から、現在にいたるまで国家と社会への責任を担う人材の養成に主眼が置かれている（vgl. Westermeyer 2015, S. 451.）。なお、バーデン公はザーレム城校の教育は独自性はなく、「リーツやパブリック・スクールやゲーテによる教育構想を寄せ集めたもの」（Dergel/Niederhofer/Feucht 2010, S. 9）と評している。

[36] Vgl. Dergel/Niederhofer/Feucht 2010, S. 35.

ドイツ田園教育舎の系譜に連なることを強く意識して設立されながら、ザーレム城校には「リーツのドイツ田園教育舎を継承する実践」と「リーツのドイツ田園教育舎にあえて抗する実践」が混在している。リーツのドイツ田園教育舎から継承した教育方針としては、「自然豊かな環境のなかで人間諸力の調和的発達を目指すという教育理念」、そしてこの理念に供する実践を象徴する「作業場における活動」があげられる。一方、リーツのドイツ田園教育舎から離反した実践としては、寄宿舎の相対化と教師と生徒の関係性の見直しがあげられる。バーデン公が地元の子どもたちの育成を喫緊の課題とみなしたことの反映として、ザーレム城校は――ドイツ田園教育舎の多くが全寮制学校として運営されているのとは対照的に――通学生にも広く門戸を開く教育施設としてスタートを切る。当初の在学生は、寄宿生 8 名に対してこれを上回る通学生 12 名という構成であった。[37]さらに、ザーレム城校は学校を「大きな家族」とみなすリーツによるドイツ田園教育舎とは異なり、プラトンの理念に倣い学校を「小さな国家」とみなしている。[38]

第一次世界大戦後の不況下における学校経営の困難を克服したザーレム城校は、近隣の施設を獲得することで拡張を重ね、1925 年にはヘルマンベルク（Hermannberg; Juniorenschule）、1929 年にはシュペッツガルト（Spetzgart; Realgymnasium）、1931 年にはホーエンフェルス（Hohenfels; Juniorenschule）、1932 年にはビルクレホーフ（Birklehof）[39]にそれぞれ附属の教育施設を設立する。

ザーレム城校の教育理念を象徴するのは、「責任への教育（Erziehung zur Verantwortung）」[40]という一貫したスローガンである。1930 年にザーレム城校は（第 1 条）若者に自己発見の機会を与えよ、（第 2 条）若者に成功と失敗の双方を経験させよ、（第 3 条）若者に社会のために無私の境地に達する機会を与えよ、（第 4 条）静寂の時間と熟考の余裕を確保せよ、（第 5 条）想像力と将来を見通し計画する能力を培え、（第 6 条）競技への取り組みは真摯に、しかし自制心をもって、（第 7 条）裕福で影響力ある子どもたちをその特権により麻痺した意識から解放せよ、という 7 ヶ条からなる「ザーレム 7 ヵ条（sieben Gesetze Salems）」を明示し、ここにザーレム城校の教育方針は確立をみる。

しかしながら、ザーレム城校の創設に関わった人々はいずれも早くにザーレムにおける教育実践の舞台から退場することになる。1929 年にはバーデン公が死去し、その志は息子のベルトールト（Berthold von Baden, 1906-1963）に引き継がれる。1932 年には初代校長ラインハルト（Karl Reinhardt）が死去し、その職務はシュミット（Wilhelm Schmidle）に引き継がれる。1933 年にはハーンが国家社会主義政権により投獄ののち追放処分を受け、ザーレムを去っている。ハーンについては、ユダヤ系という出自に加え、イギリス植民地からの留学生の大量受け入れに象徴されるイギリスとの親密な関係[41]、さらには「ザーレムとヒトラーのどちらをとるか」という回状によるザーレム卒業生への態度決定の要求に代表されるように、国家社会主義に対する非協力的姿勢が際立っていた。[42]ザーレム城校設立期のハーンはザーレム城校の教育方針の確立に携わるかたわら担当していた授業が「第一次世界大戦の歴史」と「英語」という 2 科目であり、ここからもハーンが国家社会主義と折り合うことはきわめて困難であったことが推測される。[43]

---

[37] Vgl. Ewald 1970, S. 23.　しかし、第一次世界大戦後の不況下における学校経営の安定化を目的として、生徒構成は寄宿生重視の方針に転換され、1924 年には寄宿生 75 名に対し通学生 35 名と寄宿生と通学生の比率は逆転している（vgl. Köppen 1967, S. 39.）。

[38] Vgl. Schule Schloss Salem 1995, S. 50.

[39] ビルクレホーフは 1934 年にはザーレム城校から独立する。

[40] Schule Schloss Salem 1995, S. 50.

[41] ハーンは学校運営資金獲得のため 1930 年にはアメリカにも赴いている（vgl. Dergel/Niederhofer/Feucht 2010, S. 40.）。

[42] イギリス政府の介入で出獄したハーンは、亡命先のスコットランドで 1934 年にザーレム城校の精神を引き継ぐ新たな学校（Gordonstoun）を設立し、1938 年にはイギリス国籍を取得し、1945 年にユダヤ教から英国国教会派に改宗し、イギリスにとどまり続ける。ハーンがザーレムに帰還するのは 1953 年である。

[43] Vgl. Ewald 1970, S. 23.

3. 3. ザーレム城校の「作業場における活動」

ザーレム城校における伝統的な「作業場における活動」を象徴するのは「イヌング（Innung）」である。イヌングは「興味を共有する生徒の作業共同体（Arbeitsgemeinschaft）」[44]を意味し、ザーレム城校の創設に携わったバーデン公の提案により必修科目として創設当初から導入されていたプログラムである。人間諸力の調和的発達を推進する手法として「作業場における活動」を取り入れる教育実践はドイツ田園教育舎に共通する特徴であるが、ザーレム城校にあってはこの活動が教育施設の敷地内に設けられた作業場ではなく生徒が週に 1 回足を運ぶ近隣の村で何世代にもわたってその職業を継承しているマイスターの作業場において学ぶという点でその独自色を際立たせている。[45]したがって、バーデン公の構想による当初のイヌングンの実践形態にかんがみると、ザーレム城校はそもそもの始まりから近隣社会の関係を構築する機軸として機能することをみずからに課していたといえる[46]。バーデン公がイヌングの導入で目指したのは、「正確さ(Präzision)、目測(Augenmaß)、確実性(Zuverlässigkeit)、根気(Geduld)」[47]を身につけることであり、したがって、イヌングの導入の契機としてこれを将来の職業に結びつける発想はきわめて希薄であったことがうかがえる。一方、ハーンのイヌングの理解によると、目指されているは「何か創造的なことをする機会の提供、各自に気に入った関心ごとの追求、満足や達成感の獲得」[48]であり、イヌングを通じて生徒がそれぞれの使命を見つけ出すことも期待されていたと考えられる。

ザーレム城校の学園誌『ザーレム誌（Salemer Heft）』に毎号掲載されている「イヌング報告」を手がかりとして戦間期におけるイヌングの運用を精査してみると、イヌングはこの時期、職業資格取得を視野に整備されつつあったことが確認できる。『ザーレム誌』にはイヌングを「メンバーが共通の興味を追求するグループ」と定義した上で、小屋づくりの活動を展開する 14 名によって構成される「技術者イヌング（Techniker-Innung）」、農地・家畜小屋を管理する 9 名によって構成される「農業技術者イヌング（Landwirte-Innung）」、文化イベントの開催や図書館の管理を担う 11 名によって構成される「文芸愛好者イヌング（Herolde-Innung）」、そして自然の調査・採集・講演を実施する 6 名によって構成される「自然研究者イヌング（Naturforscher-Innung）」というザーレム城校に当初から存在する 4 つのイヌングが紹介されている。[49]

『ザーレム誌』によると技術者イヌングでは会員資格が規定され、「1927 年 5 月以降は、地区のマイスター認定者によって実施される試験に合格した者を会員とする。受験希望者を対象として 1926 年冬学期に手工業授業（Handwerkerunterricht）を開講する」[50]と言明する。したがって、少なくとも 1926 年時点にあって技術者イヌングは職業資格を明確に意識した活動を志向していたことがうかがえる。

『ザーレム誌』に掲載された卒業生による投稿に注目しても、同様に、職業資格を明確に意識した活動の報告が散見する。たとえば、所定の実務活動期間（praktische Arbeitszeit）に取り組むため、ゲッテ

---

[44] Köppen 1967, S. 85.
[45] Vgl. Ebenda; Schule Schloss Salem 1995, S. 59.
[46] Vgl. Knoll 1986, S. 58.
[47] Schule Schloss Salem 1995, S. 59.
[48] Ewald 1970, S. 29.
[49] Vgl. N.N. 1929, S. 23; Ebenda, S. 28. 当初土曜日午後に実施されていたイヌングの活動は、1933 年には――ボーイスカウト・ガールスカウトの実践に関連して（vgl. Stumpff-Frster 1932/33, S. 8）――水曜日夜に移されたことがうかがえる（vgl. Casel 1932/33, S. 7）。なお、1933 年刊行の学園誌第 17・19 号には従来からの 4 つのイヌング以外のイヌングが多数紹介されている。スイスやイギリスを手本としながらボーイスカウト・ガールスカウトを設立しようとするボーイスカウト・ガールスカウト・イヌング（Pfadfinder-Innung）、物理の実験を実施する物理学者イヌング（Physiker-Innung）、ハーンと政治について語るハーン・イヌング（Hahn’sche Innung）、文学について探求するリヒター教授イヌング（Innung von Frau Prof. Richter）等である。
[50] F. 1926, S. 10.

ィンゲンの家具づくりの作業場に1926年4月から半年間にわたって建築技師志望の見習いとして――縁故で――勤務したことについての詳細な報告が掲載されているが、この報告者はザーレム城校で受けた手工実習（Handwerkerpraxis）で学んだ「工具の扱い」等の知識が役立ったと記し、[51]工科の専攻を志望する生徒にザーレム城校で開講されている手工期間（Handwerkerzeit）を活用するよう勧めている。[52]また、別の報告者は、実務経験――機械工資格試験には1年以上の実務経験の証明書が必要であり、一般的には大学入学前に半年、大学長期休暇に半年、ということで実務経験の1年をこなすことになっている――の一環で技師候補生としてブエノスアイレス行きモンテ・オリヴィア号に半年間――縁故で――乗船したことを紹介している。[53]

戦後に再建されたザーレム城校におけるカリキュラムに目を転じると、手先の器用さおよび創造的能力を育成することを目的としてカリキュラムには初等学校では工作（Bastelstunden）、中等学校では手工授業（Handwerksunterricht）、高等学校では興味を共有する生徒の共同体であるイヌング（Innung）が必修化されている。[54]さらに、1984年以降はすべての生徒が第10学年で3週間の企業実習（Betriebspraktikum）を行うことになっている。

イヌングについては、1980年代までは職業資格取得を視野に入れていたことが確認できる。たとえば、1965年時点では手工イヌングは第8学年から第9学年において週一回午後の履修が必修化され[55]、旋盤・陶芸・仕立て・金属細工・写真・印刷図版・金細工・園芸といった活動が提示されているが、自動車機械工・精密機械工・電気工・指物師・調理師については第11学年までの履修で修了資格を取得することが可能である明記されている。手工業会議所（Handwerkskammer）の監督の下で実施されたイヌングについては、第8学年と第9学年のイヌングを終了すると手工業会議所主催の職人資格の中間試験（Zwischenprüfung zur Gesellenprüfung）に規定されている実習の1年分に換算されることになっている。[56]この前提のもと、家具作り・鍛冶・自動車修理は男子生徒に、仕立て・製本は女子生徒に、陶芸は男子生徒と女子生徒に共通して人気のイヌングに数えられている。[57]一方、1994年の時点では、イヌングに期待される成果は「学科が苦手な子に成功体験をもたせること」および「素材を実地に美的に活用することを学ぶこと」[58]にとどめられ、修了資格の取得の可能性については言及されていない。したがって、ザーレム城校における「作業場における活動」は1980年代の段階で職業資格取得を相対化させる方向のカリキュラム改変に舵を切ったと推測される。職業資格取得の相対化という方向性は、その後、21世紀初頭の中等教育制度改革によって決定的なものとなる。大学進学希望者を対象とする中等教育学校であるギムナジウムが2004年をもって従来の9年制（G9）から8年制（G8）へと移行したことを受けて中等教育期間が1年間短縮され、ザーレム城校における職業資格取得を視野に入れたカリキュラムの復活の可能性はこの時点をもって完全に閉ざされることになったのである。

---

[51] Vgl. Z. 1927, S. 11.
[52] Vgl. Ebenda, S. 13.
[53] Vgl. R. 1927, S. 11.
[54] Vgl. Schule Schloss Salem 1963.
[55] イヌングは1965年時点、毎週1回午後に手工業の熟練マイスターが第5学年（Sexta）から第10学年（Untersekunda）を対象として提供する手工修行（handwerkliche Ausbildung）として理解され、その内訳は製図・写真・陶芸・家具作り・電気技術・機械技術・自動車技術・模型作り・金属加工・調理・保育・園芸と多岐にわたっていた。それぞれのイヌングの成果を示す場として毎年1回ないし2回展示会が開催された（vgl. Alt-Salemer-Vereinigung 1965）。
[56] Vgl. Schule Schloss Salem 1983; Schule Schloss Salem 1988.
[57] Vgl. Köppen 1967, S. 86.
[58] Schule Schloss Salem 1994.

4.「作業場における活動」の可能性　―ウアシュプリング学校とザーレム城校の比較から―

ドイツ田園教育舎の教育理念は「作業場における活動」を人間諸力の調和的発達に不可欠なものとみなすが、「作業場における活動」の位置づけについては設立時の 20 世紀初頭から現代にいたる一世紀のあいだに教育施設ごとに様々に推移している。本稿では、人間諸力の調和的発達の基盤という位置づけからスタートした「作業場における活動」について、職業資格取得の体制を整備することで「職業に向けられた教育」を強化する方向性に特徴づけられる教育施設であるウアシュプリング学校、そして職業資格取得の可能性を胚胎する「職業に向けられた教育」を一時期強化しながら近年これを放棄する決断を下した――したがって、人間諸力の調和的発達という目的に特化する原点回帰の方向性に特徴づけられる――教育施設であるザーレム城校に注目し、「作業場における活動」の位置づけに関わる対照的な変容とその背景について精査した。そこに浮かび上がってきたのは、「作業場における活動」が「職業に向けられた教育」との距離を縮める教育施設にあっても、「作業場における活動」が「職業に向けられた教育」との距離を広げる教育施設にあっても、時代が要請する「社会への開かれ」を意識しながら教育構想に修正を加えるという姿勢については通底しているということである。

職業資格取得の体制を整備することで「職業に向けられた教育」を強化するウアシュプリング学校は明確に「社会への開かれ」を意識した「作業場における作業」の活用を行っているといえる。一方、ザーレム城校における「作業場における活動」の活用の変化に注目すると、設立当初のイヌングはバーデン公のこだわりから学外の作業場で実施する形態であったが、現在のイヌングは学内の作業場で実施する形態となり、「作業場における活動」が「社会への開かれ」に連なる物理的条件は縮小している。その一方で、現在のイヌングは、20 世紀初頭の設立当時に回帰するかたちで「人間諸力の調和的発達」という目的に焦点化して実施されており、これは一時期ザーレム城校で導入されていた「職業に向けられた教育」との対比からは、「社会への開かれ」という観点において後退しているように映る。

しかし、実際にはザーレム城校の教育実践は全体像としては「社会への開かれ」の意識化を減退させることなく維持している。現在のザーレム城校における「社会への開かれ」を補強する役割を担っているのは、ザーレム城校が設立当初から今日まで一貫して重視している奉仕活動である。ザーレム城校における奉仕活動の重視は、ドイツ帝国最後の宰相であるバーデン公とその政治秘書であるハーンが共有する戦争責任を問う姿勢がザーレム城校設立意図の根幹として横たわっていたこととも無縁ではない。現在、ザーレム城校の生徒は第 9 学年と第 10 学年で保健業務・消防・航海業務・ラウンドスクエア業務・自然保護業務・社会業務・技術的救援組織といった奉仕活動に従事することになっているが、ザーレム城校の奉仕活動で注目されるのは、これらの活動が州と連携して実施されていることである。したがって、ザーレム城校における奉仕活動は語義どおり「社会への開かれ」を象徴するプログラムとして機能しているといえる。[59]

---

[59] 戦後のザーレム城校における「社会への開かれ」に向けられた教育実践として特記に値するのは、ザーレム城校の創設者であるバーデン公の甥であり 1948 年から 1959 年までザーレム城校の校長職にあったハノーファー公（Georg Wilhelm von Hannover, 1915-2006）による改革である。ハノーファー公は「労働に携わること」および「社会に関わる意識をもつこと」を目的として産業見学旅行と夏季休暇中 3 週間の社会活動を導入する。男子生徒の多くは道路工事や難民キャンプ、女子学生の多くは乳児院や病院を社会活動の場として選定している（vgl. Köppen 1967, S. 73）。1974 年から 2005 年にいたる長きにわたりザーレム城校を校長として牽引し、国際バカロレア導入（1992）による国際化、奨学金制度による生徒階層の多様化に貢献したブエプ（Bernhard Bueb, 1938-）は、「より広範な社会連関への生活への準備、込み入った生活への準備」（Bueb 1981, S. 4）である奉仕活動を現実との関連づけを強化する活動として注視している。ただし、奉仕活動が活発に展開にもかかわらず、生徒が奉仕活動において獲得した知識や技術を生かして卒業後に消防隊員や救急隊員への道に進むことは想定されてない。奉仕活動において獲得される知識や技能は生徒の職業に関わる土台の一角ではなく、あくまでも生徒の人生に関わる広義

ここでさらに「世界への開かれ」に目を向けると、伝統校の国際ネットワークであるラウンド・スクエア・スクールの活動への取り組み、そして世界に拠点を有するアウトワード・バウンド・スクールの活動への参加、そして国際バカロレア取得のカリキュラムの履修を通じて、ザーレム城校の生徒には日々「世界への開かれ」が意識されている。ザーレム城校において貴族的思考と社会的思考は分かちがたく結合しており、まさにそれゆえにザーレム城校はエリート校とみなされながら閉鎖性・隔離性・排他性の対極にみずからを置き、時代が要請する「社会への開かれ」と向き合う姿勢を堅持していると考えられる。[60]

引用文献

Alt-Salemer-Vereinigung (1965): Salem. Eine Informationsschrift über die Schulen Salems. Heidelberg: Werner Dold.

B., Lisel (1927): Innung-Bericht der Naturforscher. In: Salemer Heft 3, 17-18.

Bauer, Liesel (1928): Innungsbericht der Naturforscher. In: Salemer Heft 5, 11-12.

Bergfeld, Mia (1929): Mein Praktikum. In: Salemer Heft 7, 17-22.

Berthoud, Andreas (2009): Schülerhandwerk. In: 100 Jahre Landschulheim am Solling 1909-2009. Festschrift. Holzminden: Jörg Mitzkat, 141-144.

Bueb, Bernhard (1981): Anspruch und Wirklichkeit des heutigen Salem. In: Schule Schloss Salem (Hrsg.): Vom Nutzen und Nachteil der Salemer Erziehung für das Leben. 1-5.

Buschmann, Gisela (1932/33): Innungsberichte. Innung von Frau Prof. Richter. In: Salemer Heft 17/19, 10.

C., Casel (1932/33): Innungsberichte. Landwirte-Innung, In: Salemer Heft 17/19, 7.

Dergel, Eveline/Niederhofer, Ulrike/Feucht, Stefan (2010): „In Dir steckt mehr als Du glaubst“. Tettnang: Lorenz Senn.

Ehlert, Karlheinz (2009): Gartenbau. In: 100 Jahre Landschulheim am Solling 1909-2009. Festschrift. Holzminden: Jörg Mitzkat, 225-228.

Ewald, Marina (1970): Salem School 1919-33. Foundation and Expansion. In: Hermann Röhrs/Hilary Tunstall-Behrens (Hg.): Kurt Hahn. London: Routledge & Kegan Paul. A Life Span in Education and Politics, 22-38.

F., Konrat (1926): Bericht der Techniker-Innung. In: Salemer Heft 1, 10-12.

Gruber, Peter (1928): Innungsbericht der Herolde. In: Salemer Heft 5, 9-10.

Günther, Karl-Heinz (1980): Bernhard Hell. Gründer der Urspringschule. 1877-1955. In: Robert Uhland (Hrsg.): Lebensbilder aus Schwaben und Franken. 14. Band. Stuttgart: Kohlhammer, 467-502.

Herrenbrück, Edgar (2009): 1909 bis 1945. Gründung und Neuerfindung. In: 100 Jahre Landschulheim am Solling 1909-2009. Festschrift. Holzminden: Jörg Mitzkat, 23-24.

Jaffe, Hans (1932): Erfahrungen im landwirtschaftlichen Arbeitslager. In: Salemer Heft Sonderheft, 25-30.

Kiliani (1928): Neues von der Landwirte-Innung. In: Salemer Heft 5, 10-11.

Knoll, Michael (Hg.) (1986): Kurt Hahn. Erziehung und die Krise der Demokratie. Stuttgart: Klett-Cotta.

Köppen, Werner (1967): Die Schule Schloss Salem in ihrer geschichtlichen Entwicklung und gegenwärtigen Gestalt. Ratingen bei Düsseldorf: A. Henn.

McLachlan, Donald (1970): Hahn. In: Hermann Röhrs/Hilary Tunstall-Behrens (Hg.): Kurt Hahn. London: Routledge & Kegan Paul. A Life Span in Education and Politics, 1-13.

Näf, Martin (2006): Paul und Edith Geheeb-Cassirer. Gründer der Odenwaldschule und der École d’Humanité. Deutsche, Schweizerische und Internationale Reformpädagogik 1910-1961. Weinheim/Basel: Beltz

Nipkow, Karl Ernst (2007): Der schwere Weg zum Frieden. Geschichte und Theorie der Friedenspädagogik von Erasmus bis

の準備の一角に位置づけられているからである（vgl. Alt-Salemer-Vereinigung 1965）。

[60] Vgl. Köppen 1967, S. 72. このことは「ザーレム 7 ヵ条」のとりわけ第 3 条と第 7 条が「社会への開かれ」志向を象徴していることにも確認できる。

zur Gegenwart. Güthersloh: Güthersloher Verlagshaus.
N.N. (1929): Die Innungen. In: Salemer Heft 7, 23 & 28.
P., Alice (1927): Bericht der Herolde-Innung. In: Salemer Heft 3, 20-21.
P., Georg (1927): Technikerhütte. In: Salemer Heft 3, 21-22.
Pape, Rolf von (1932/33): Innungsberichte. Hahn'sche Innung. In: Salemer Heft 17/19, 9.
Pielorz, Anja (1995): Werte und Wege der Erlebnispädagogik Schule Schloss Salem. Neuwied: Leuchterhand.
Platen-Hallermund, Georg (1928): Bericht der Techniker. In: Salemer Heft 5, 12-13.
R., Arni (1927): Als Ingenieur-Aspirant nach Südamerika. In: Salemer Heft 3, 11-14.
Röhrs, Hermann (1970): The Educational Thought of Kurt Hahn. In: Hermann Röhrs/Hilary Tunstall-Behrens (Hg.): Kurt Hahn. London: Routledge & Kegan Paul. A Life Span in Education and Politics, 123-136.
Rüger, Beate (2009): Unterricht im Wandel. In: 100 Jahre Landschulheim am Solling 1909-2009. Festschrift. Holzminden: Jörg Mitzkat, 97-115.
Schule Schloss Salem (1963): Prospekt.
Schule Schloss Salem (1983): Prospekt.
Schule Schloss Salem (1988): Prospekt.
Schule Schloss Salem (1994): Prospekt.
Schule Schloss Salem (1995): Schule Schloss Salem. Chronik Bilder Visionen. Geschichte und Geschichten einer Internatsschule. Salem: Schule Schloss Salem.
Sommerhoff, Gerd (1932/33): Innungsberichte. Physiker-Innung. In: Salemer Heft 17/19, 9.
Stumpff-Forster, Erika (1932/33): Innungsberichte. Pfadfinder-Innung. In: Salemer Heft 17/19, 8-9.
Urspringschule (2018a): Abitur und Gesellenbrief. (Maßschneider/in, Schwerpunkt Damen)
Urspringschule (2019b): Schule erleben. Zukunft bilden.
Weller, Walter (2009): Landwirtschaft. Ein Schüler erinnert sich. In: 100 Jahre Landschulheim am Solling 1909-2009. Festschrift. Holzminden: Jörg Mitzkat, 229-233
Westermeyer, Bernd (2015): Die Schule Schloss Salem. In: Christopher Haep (Hrsg.): Grundfragen der Internatspädagogik. Theorie und Praxis. Würzburg: Königshausen & Neumann, 449-461.
Wilhelmi, Jutta (1998): Auf der Suche nach der Welt von gestern. Die Sehnsucht nach Eliten in der deutschen Gesellschaft. In: Pädagogik 50(1), 51-53.
Z., Wilhelm (1927): Ein halbes Jahr Schreinerei in den Möbelwerkstätten Reitmeier in Göttingen. In: Salemer Heft 2, 11-13.